
Contrary to a heart

春野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Contrary to a heart

【Nコード】

N2804G

【作者名】

春野

【あらすじ】

題名の和訳は『心と裏腹に』。テレビ局某ドラマ企画部に勤める『水無月朝日』は、新人故にを雑用ばかりだったが、自分の仕事にやりがいを持っていた。そして、部の最高責任者である番組プロデューサーの『高島尚秋』に憧れ、尊敬していた。いろんなものに囲まれながら、仕事に励んでいる彼女のもとへ、あるとき妙な電話がかかってくる。そこから、彼女の時計の針が狂い始めた…**主な登場人物**水無月朝日>AsahiMinaduki<高島尚秋>TakakiTakashi<清水佐夜香>Sayaka

Shimizu <相原浩介> Kosuke Aihara <光田翔太
郎> Shotaro Kouda <濱野杏子> Kyoko Haman
o <

第1話 プロローグ

あの人はいつも泣いていた。

そんな姿を見るたび、そんな苦悩している表情を見るたび、俺は迷った。

いつも明け方近くなってから溶けたように、這うように、布団にもぐりこむ姿を見るたび、俺は迷った。

朝起きて、腕まくりをしながらご飯を作るあの人の細い両腕に、ねじりこまれた様な何層にもなった痣があるのを見て、俺は迷った。

「これでいい…これでいいんだよ」

いつだったからか、そう呟きながらあの人が頭を撫でてくれるその行為に、安心感を抱けなくなった。その代りに虚しさがただ、ただ俺の頬を張った。

それでいいのか？それでいいのか！？

その陰湿な問いに、俺は背を向けることしかできなかった。だって、わかってたから。

こんな幼い俺に何もできない。

できるはずがないじゃないか。できたらもうしてるさ。

…むしろ、なにかできたらびっくりするだろ。世間は。そんな甘い社会じゃないんだ。

その問いは、俺のそんな気持ちをわかってる。

わかってて俺を煽る。煽って、煽って。

そして、俺の無力さに俺を潰け込む。

よくできた深層心理だと常々思っていた。

それはもう幼いころからずっと。

でも、今から思えばそんなことに気づけるような、理解していたような大腦をもちあわせていたのなら、あの頃の俺にはなにかできていたんじゃないのか？と思えるようになった。

それに気づいてからは、そりゃもう自問自答の日々。

「自問」は日を増して粹がっていくけれど、「自答」は日を増して萎えていく。

四字熟語で表せるようなフェアな世界じゃなかった。流され、流されるまま、俺はただ漂流していた。

太平洋。大西洋。インド洋。日本海。オホーツク海。そんな名前の付いたところじゃないよ。

もっと辺鄙で、もっとぬかるんだとこ。

「漂流していた」っていう動詞が適切なのかもわからないような、そんなとこ。

…助けを求めなかったのかって？

求めてもどうにもならないさ。

「そんな甘い社会じゃない」。さっき言っただけじゃないか。そんな世界に自分から助けを求めるなんて、正直、糞くらえだ。

それで、俺がこういう世間から見ればいわゆる「可哀想」な幼少時代を送ってきたことを耳にするとすぐに同情して、今という場所から過去という場所に住む幼い俺に、「そんな状況を脱出するためになにか方法はなかったのか」とか、眉を下げて俺にさめざめとした声で尋ねるとかいうことなんてことも、正直、糞くらえだ。

オジサン、オバサン、そーゆーのは、「後の祭り（アトノマツリ）」ってゆーんだよ。

いい大人がなにいつてんだ。

だからさ、とにかく俺が言いたいこと聞いてほしい。

余計なこと、口にしないで。

もううんざりなんだよ。疲れたんだよ。

放してほしい。

助けてほしい。

誰か、助けて。

第2話 電話との戦い

「はい。『ひとやすみの法則』企画部です」

彼女は今、電話の応対をしている。

連続ドラマの企画部の一員として、テレビ局で働いているところだ。週一のドラマの中でも、高視聴率をマークしているこの番組は、テレビ局の上層部も目をかけている存在。

17階に位置しているこの部屋には、今日も大人数が出入りしているわけだ。

「上田ディレクターにお客様が」

「上田ディレクターですか？」

彼女は受付を相手にしゃべる。

「NKO機器の村川様でございます」

「わかりました。上田ディレクターにつながますね」

彼女は『2』のボタンを押すと、4つ隣の席の上田に声をかける。

「上田ディレクター、受付からです。2番でお願いします」

まわりの電子機器の音に遮られないように、大きめの声を出す。

「2番?...わかった」

上田は2番を押しながら、受話器を手取る。

彼女はその様子を見届けてから、机の上の書類をあさりだす。上に指示された仕事に取り掛かるわけだ。

しかし、まもなく電話のベルが鳴り、まじめに取り掛かることなど、なかなか難しい。

それでも気を緩めることなく、雑に対応することなく、熱心に仕事をこなす。

『新人だから』

そういわれればそれまでだが、彼女はそれだけじゃなかった。

彼女は脱却したかったのだ。

昔の自分と...

「水無月さぁーん！書類できた！？」

誰かが彼女の名前を呼ぶ。

どうやら、書類を頼んでいた上司らしい。

「あつ。今日までには出来上がらせます！」

「頼んだからね！」

「はい！」

彼女はまた鳴り出した電話の受話器をとった。

午後三時ごろ。

彼女は、湯を沸かすやかんの前に立っていた。

上司にコーヒーでも持っていこうかと考えていたのだ。

彼女が憧れ、尊敬する上司に。

やかんは次第に沸騰音をたて始めた。

コーヒーのフィルターにお湯を通し、マグカップにコーヒーを注ぐ。
茶色を帯びたお湯が滴る。

大人の香りを漂わせる湯気を放ちながら、彼女は上司の元へと運んだ。

プロデューサー専用の部屋へと。

「高島プロデューサー、コーヒー。どうぞ」

高島は下がりかけている眼鏡を指で上げると、彼女を見上げた。

「ああ、水無月さん。ありがとうございます」

「入れたてでちよつと熱いですけど」

「ちょうど喉が渴いていたところだったので。ありがとうございます」

高島は彼女が差し出すコーヒーを受け取った。

息をかけて少し冷ましてから、コーヒーを一口含んだ。

いつも微笑んでいるような高島が、真っ直ぐな目でコーヒーを味わうと彼女のほうを見た。

「ちょうどよくて、美味しいですよ。ありがとうございます」

眼鏡の奥の瞳がやけに澄んでいた。

彼女はその瞳を見ようとしてみる。

だが、すぐにそらしてしまう。

これが「恥じらい」というものなのだろうか。

「そ、それじゃ、お仕事がんばってください!」

「ありがとう」

高島は彼女にそう返した。

彼女がドアノブに手をかけようとしたとき

「水無月さん」

彼女はあわてて振り返る。

「はい?」

「…これ」

高島は茶封筒を手渡した。

「私宛に届いた手紙の中にこれが入っていました。宛名が『水無月朝日様』となっていましたので、あなたに。」と

「あつ、すみません」

「いいえ。なにも、あなた宛の郵便物を届けただけですから。…あ、中身は見えていないので安心してください」

「わざわざ、すみませんでした」

「それじゃあ、お互い仕事頑張りましょうね」

高島は再び朝日へと笑いかける。

朝日に思わず笑みがこぼれた。深々と一礼して、高島の部屋を後にした。

朝日は机に座ると、高島から受け取った封筒を封切った。

中には、A4サイズの白紙のコピー用紙が入っていた。

裏返しても何も書いてなく、朝日は間違っを入れてしまったのだと思うことにした。

深く考えてもきりがないからだ。

そして、ペンを持って仕事を再開しようとしたとき、朝日の右手の斜め前にある電話が鳴った。

「はい、ひとやすみの法則企画部です」

朝日が出ると、相手はしばらく返事をしなかった。

「あ、あの…」

「…ドラマの視聴者なんですけどー」

若い男性の声が返ってきた。

「あ、いつもご視聴ありがとうございます」

「てかさ、さっきみたいに視聴者なんですけどーってはじめてよかったわけ？」

「はい。大丈夫です」

「初めてだからさ、こんな風に電話かけんの」

朝日の頭の中には、もうすでに相手の人物像が出来上がっていた。

絶対に茶髪に、腰でジーンズをはくようなやつだ。と。

「それで、ご用件は…？」

「ん？あー。あのさ、…あのキャスティングっつーの？」

「はい」

「そんで、あれ。なんとかしてくんない？」

『あれ』って言われても…と朝日は苦笑していた。

「…あの、台詞間違いとかが、台詞の言い回しが悪いとかでしょうか？」

「いや、あのキャスティングやめてくれない？」

「…えっ？」

朝日は目が点になった。

なにせ、こんな要望を赤裸々に言う視聴者は初めてだったからだ。

「それでも、もうドラマはスタートしていますし、なにより今からキャスティング変更というのは…」

「んだよてめえ。視聴者の意見を水の泡にするつもりかよ！」

「いいえ、決してそういうわけではありません。ただ、ドラマがスタートしているのにも関わらず、今から変更はできないということ

なのですが」

相手は、文句を混じらせたため息をついて見せる。

そんな無理な意見をぶつけられても…と朝日は頭をひねらせた。こついうときはどうやって切り交わすべきなのかと。

まじでさ、あんなくそ真面目なドラマなんていまさらはやんねえし。…なんかさー、もっとこつ色気があるやつ？あんなのがいいんだつて」

「脚本も、ドラマの展開も決まっていますし」

「主役もさ、もっと胸のあるやつ使えよなあ！まじでつまんねえんだけどー！」

朝日は受話器から耳を離れた。

鼓膜がおかしくなりそうだった。

「それで…そういうあんたは、何カップ？」

「えっ！？」

こいつ、頭おかしいんじゃないだろうか。

朝日は受話器を切ろうと、耳から徐々に離していった。

「おーい、お姉ちゃん。電話きるなよ。他局のマスコミに『ひとやすみの法則 視聴者の意見を踏みにじる！！』って垂れ込むからな！」

朝日は急いで、受話器を耳に当てる。

「す、すみません！」

「楽しく話そうよ。せつかく出会えたんだし」

相手は高らかに笑った。

朝日は否が応でも、置くことはできない。

受話器を置いたら、番組がめちゃくちゃになってしまう。泣きたい気持ちでいっぱいだった。

答えようと口を開きかけた、ときだった。

「はい。替わりました。ひとやすみの法則番組プロデューサーの高島尚秋です」

朝日の受話器を高島がいきなり取り、応対し始めたのだ。

「視聴者の方ですか？…いつも視聴ありがとうございます。はい…あ、なんでも私たちの番組に意見があると伺っていたのですが。はい…そうですね？失礼いたしました。…はい。それではこれからも当番組をよろしくお願いいたします」

高島はいつもの冷静さで応対すると、受話器を置いた。

朝日はただ呆然としていた。

「…大丈夫ですか？」

「あ…はい！大丈夫です！！」

「ああいう視聴者は結構いるんですよ。いたずら半分に困らせる質問ぶつけてくる方って」

「ど…どうして、私が困っているって知ってたんですか？」

「ちょうどスタジオに顔出しに行こうかと思つて部屋を出てきたら、水無月さんが顔真っ赤にして、たどたどしく応対していたものだから。これはいつものだなと」

高島はいつもの笑顔で話す。

朝日は自分がそんな状態に陥っていたことを改めて知り、さらに顔を赤くする。

「ありがとうございます！」

「いいえ。もしまたなにかありましたら、いつでも呼んでください」高島は朝日に微笑みかけると、颯爽とその場を後にした。

『高島プロデューサーの顔がすぐ目の前に…』

朝日はさっきの光景を思い返す。

地獄から天へと舞い上がった。

波打つ栗色の髪。

肩より少し下まで下げて、彼女は歩いている。

ヒールの高い黒革の靴。

胸を強調させる、服に袖を通し、彼女は歩いている。

「清水さん、おはよう」

先輩ディレクターが、廊下を歩く清水に挨拶をした。

「おはようございます」

清水は礼をする。

しかし、それは他の誰よりもしなやかで、艶やかだった。

「すごいよねえ。そっちは」

「…すごいとは、なにもそんなに」

清水は照れて見せた。

これも、自分を褒めてくれる相手に対しての気持ちだ。

可愛さも混じらせながら、先輩の顔を見上げる。

「なんだっけ、たしか…」

先輩は頭をひねらせていた。

「…そう、ひとやすみの法則！！清水さんのいる番組ですよ。いいよねえ。報道は浮かばれないよ」

先輩は参ったとばかりに、苦笑いをした。

清水はというと、まあ言わんばかりの反応だ。

「それじゃ、頑張つてよ。応援してるからさ」

手をひらひらさせながら、先輩は去っていった。

清水はというと、まあ言わんばかりの心境だ。

清水は、ヒールの音を鳴らしながら、ひとやすみの法則企画部へと足を進めた。

「…はい。それではこれから当番組をよろしくお願いいたします」
清水が企画部に足を踏み入れたとき、目の前の世界でありえないことが起こっていた。

「…大丈夫ですか？」

「あ…はい！大丈夫です！！」

清水は呆然となった。

『な…なに、あいつは！？あの小娘は？』

「ああいう視聴者は結構いるんですよ。いたずら半分に困らせる質問ぶつけてくる方って」

「ど…どうして、私が困っているって知ってたんですか？」

清水は高島相手に話す、名前も知らない小娘が無性に腹が立った。
なんだ？あいつは？

それしか頭に浮かばない。

あんな光景は今までに見たことがなかった。

ましてや、あの高島プロデューサーが…

「ちょうどスタジオに顔出しに行こうかと思つて部屋を出てきたら、水無月さんが顔真っ赤にして、たどたどしく応対していたものですから。これはいつものだなと」

高島はいつもの笑顔で話している。

水無月？あの小娘の名前は『水無月』っていつのか！？

「ありがとうございます！！」

うれしそうに笑顔で高島にお礼を言う小娘が、清水の癪にさわる。

「いいえ。もしまたなにかありましたら、いつでも呼んでください」

高島は小娘に微笑みかけてしまった…。

……ありえない。

『いつでも呼んでください』！？

私にそんなことを言ってくれたことなんて、今までないじゃない！！
清水の中には、明らかな青い炎が燃え盛っていた。

あの事件の後、企画部中の女子ではその話題で盛り上がっていた。

清水ももちろんその輪の中に入っている。

そこで聞き出したことは、

- 1・あの癪にさわる小娘の名前は『水無月朝日』
- 2・新人のくせに、高島プロデューサーとのうのうと話していた
- 3・友達が今のところいない
- 4・電話番をしていて、いつも大変そうに仕事をしている
- 5・電話番の仕事のせいで自分の仕事ができなくなり、いつも残業をしている

この5つだった。

しかし、情報がこれだけというのは物悲しい。

いつもなら、ありとあらゆるほど、いらないところまで情報が集まってくるというのに、今回はこれだけだったからだ。

友達がいなくて、自分の素性を話す相手もないということも理由のひとつだろうが、これだけの女子がいてわずかだということは異常だ。

しかも、一同の本命はただひとつだというのに。

「清水さあん。どうするんですかあ？これから」

後輩が清水に尋ねてくる。

こいつも可愛い顔して、なかなかの業師だ。

「私？んー、いろいろ話したりしちゃおうかな。…意外にやり応えありそうだし。ねえ？」

清水は巻いている髪をいじりながら、淡々と言い放った。

「もしかして、もうやる気ですかあっ！？」

後輩たちがそれぞれに声を上げる。

……若い。実に若い声だ。

清水は目を細めた。

「まあ、簡単よ。あんな小娘なんて。なんとかなるわ」

「さすがあー。本当に頼りがいがありますよねえ」

……黄色い。実に黄色い声だ。

なんだか、褒められているのにもかかわらず、胸焼けするのは気のせいだろうか。

その会合の後、ひとまず自分の席に戻った。

少しパソコンのマウスを動かしながら、考えていた。

華麗にやってのけなければ、清水佐夜香の名が立たない。

「清水くーん。この書類、もうちょっとそっちに寄せてくれないかな」

隣の先輩が試行錯誤している清水に申し訳なさに声をかける。

…ダサイ顔して、私に指図すんなよ。

心の中で舌打ちしながら、上辺で「すみません」としおらしく書類

を寄せた。

その瞬間、瞳に光が戻った。

「水無月さぁーん」

清水は朝日のところを訪れた。

…まず、基本的なところから攻めていこう。

清水の中には、ある程度のプランが立てられているらしい。

「はい？なんでしょうか？」

「コーヒーでもどう？入れてきたんだけど、休憩に少し。ねっ？」

「あつ、ありがとうございます！」

朝日は清水が手渡すコーヒーを受け取った。

「いつも大変よねえ。電話番号しながら、書類整理でしょ？」

「いいえ。これも新人としての役割ですから」

朝日の謙虚な態度に感心していた。

うわべであれこれ話すものの、清水自身、朝日の頑張っている姿など目に留めたこともない。

…これが、情報のなせる業。

「清水先輩って、本当にお綺麗ですよ。いつもすごいなって思っているんです。先輩のオーラって言うのか…そういうものに」

朝日は意外にも、清水の名前を知っていた。

それだけ、目立つ存在なのだと清水は改めて感じ、高みに登った。

pipipipipipi…

清水のほうから着信音が聞こえる。

ポケットから携帯を出し、話し始めた。

「もしもし、清水です。あ、こんにちは！はい…え、今からそちらにですか！？…いや、迷惑じゃないんですけど。…今日中に仕上げなきゃいけない書類があつて。…い、いや、そういうことじゃないんですよ。はい…それじゃあ、その時間にお伺いします。すみません…」

清水は携帯を畳み、元の場所へしまった。

「…ああ。どうしょ」

「どうしたんですか？」

深いため息をついて口をとがらせる先輩に、朝日は尋ねる。

「報道の先輩から呼び出されちゃって。でも、やらなきゃならない仕事があるから断ったの。…きつと、企画の清水はノリ悪いとかつて噂たてられちゃうわ…」

「……よかったら、その仕事、私がやりましょうか？」

朝日がカップを持ちながら、清水に話しかけた。

「えっ？いいの？」

「はい。別に大丈夫ですよ」

朝日は微笑んだ。

清水は、ありがとう。ちょっと待ってて。というと、机の上に用意してあった、書類の山を朝日の机の上に置いた。

「よっし！そしたら、お願いねっ！バイバーイ！」

清水は手を振りながら、去っていった。

朝日の目は点になった。

「『アラームを利用して携帯に電話が来ました』作戦成功」
ガッツポーズをし、清水はにやりと笑った。

第3話 天変地異とはこのこと

P M 11:43。

まさかの事態に驚きながらも、頑張つて仕事をしている朝日の姿がそこにあつた。

まわりの机には、もう誰一人として残っていない。

やっと終わりそうだった仕事、まさかこんな形で引き伸ばされるとは。

しかも、「明日までね!」と清水は朝日に電話をかけてきていた。

電話の向こうは、大きな機械な伴奏音と熱唱する声。

さすがの朝日にも、自分が置かれた状況をしっかりと理解していた。まさに、昨日の仕事に引き続き、徹夜2日目に突入しようとしている瞬間だった。

そのとき、向こうの部屋の扉がゆっくり開いた。

まさかとは思った。

テレビ局でそんなことが起こるはずがない。

朝日は背筋を凍らせた。

あえて、こういうときは音のする方向を見ないほうがいい。

朝日は書類の山に身を隠していた。

どんどん自分のほうへ、足音が近づいてくる。

机に向かいながら、迫りくる恐怖に目をきつく閉じた。

次の瞬間、肩を誰かが叩いた。

「は……い……」

恐る恐る後ろを振り返る。

「水無月さん。まだいらつしゃったんですか?」

そこには想像していたものとはまったく違う、高島の姿があつた。

「はあ……高島プロデューサーですかあ……」

安堵のため息とともに、言葉を漏らした。

「なにか不都合でもありましたか?」

「いいえ。誰もいないはずの部屋のドアが、いきなり開いたもの
すから。それもゆつくりと。…幽霊か何かと思っちゃいました」

高島はいつもの笑顔で笑った。

朝日の緊張していた心に、高島の笑い声が染み渡った。

「驚かせてすみません。明日の朝一の会議で使う資料を再確認して
たもので」

高島は謝っているのにもかかわらず、いつものとおり微笑んでいる。

「い、いえ！ただ私の思い込みでしたから」

上司に謝られるなんぞとんでもないこと。

朝日はここに誰もいなくて良かったと悟った。

……待てよ。

ということとは、私と高島プロデューサーの2人つきり？

朝日にそんな思いがよぎる。

その瞬間、心臓が高鳴った。

「なんですか？それは」

高島は不思議そうな目で書類を指差した。

「あ、それは明日までと頼まれた書類です」

「でも、こんなに書類を一気に頼まれるものですか？ものすごい量
ですし。」

「そんなことないですよ。大丈夫です」

高島は書類のうちの一部を手にとり、読み始めた。
しばらくすると、眉間にしわを寄せた。

「ん？これは、私が清水さんに頼んだものです…。1週間で仕上げ
てくれればよいと言ったのですが。何せこの量ですから」

「い、1週間!？」

朝日はやっと『はめられた』感に陥った。

清水にしてやられた。

「ええ。…それを何故あなたが？」

「それは…」

「清水さんに頼まれたんですね？」

ちがう、と喉元まで出かかったが、高島の鋭い視線でそれは押し戻された。

「…はい」

朝日は申し訳なさそうに、結果論を述べた。

「それでは…」

高島は着ていたコートを脱ぎ、鞆を置いて、隣の席に腰掛け書類を取った。

朝日はいきなりの出来事に、目を点にさせた。

「プ、プロデューサー！なにを」

「そもそも私がお願いした仕事です。いくら新人とはいえ、これはやりすぎだ。しかも明日までとは無理な話。…私もやります」

どこか硬い微笑で高島は答えた。

「いえ！私がやります。頼まれた仕事ですから！」

「いいんですよ。あなたはこの頃、いささか疲れすぎています。目の下にこんなひどい隈まで作って、これはさすがに異常です。入社したてのあなたを倒れさせてしまったら、…上司としてあなたのご両親に合わせる顔がない」

眼鏡を指で上げながら、高島はペンを走らせる。

朝日は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「プロデューサー…でも」

「もうそれはいいですから。そうしなきゃ、明日までに終わりませんよ。せつかく2人でやるんですから、頑張りましょう。ここまでの努力を無駄にしたくないでしょう？」

高島の微笑みはやっと柔らかくなったようだ。

「すみません…」

朝日は自分が置かれた状況に、ひたすら心臓を高鳴らせていた。

2人で作業を開始してから、約1時間半が経過した。

日付が変わっても、外の世界の賑やかさは治まることを知らなかった。

この時間までずっと会話をしていない2人。

朝日はあまりの静かさに、高島がうたた寝しているのではないかと気になり、書類の山の影から、伸びをするふりをして除いてみたりしていた。

高島は黙々と書類に向かって、ペンを走らせている。

背筋を伸ばして椅子に座っている姿は、とても華奢で清らかだった。あの部屋の中でいつもこうして、独りぼっちで仕事をしているのだろう。と空想をふくらませていた。

そして、緊張のせいか、まったく眠くなっていないことに気づいた。いつもなら机に突っ伏して寝ている時間帯。

朝日には新鮮な感覚だった。

「…あつ」

高島が小さく声を上げた。

書類の山の影から、朝日は顔をのぞかせた。

「どうかしましたか？」

「余計な点を無意識のうちにつけてしまっていたみたいで。…修正液あります？」

「はい。もちろんです！必需品ですから」

朝日は自分専用の修正液を手渡した。

「すいません…」

高島は修正液で誤字を白く塗りつぶすと、礼を言って返した。

「……………」

高島は膝に手をそろえ、修正箇所を見つめている。

朝日はそんな高島を見つめている。

「…こんなに長かったんですね」

「…なにがですか？」

高島は微笑んだ。

「修正液が乾くのって…こんなに長かったんですね」

「そうですか？いつものことですよ？」

「たぶん、電子機器が動いてなくて社員たちがいないぶん、いくら

か室温が低いのでしょうか。暖房もフル稼働していませんし。そのせいで乾くのがいくらか遅い」

修正液ひとつでそこまで考えたことなんてなかった。

きつと、こんな細かいところまで考えてしまえるような性格が、高島尚秋がヒットメーカーと呼ばれる所以なのだろう。

「…すこし、休みませんか。集中力が途切れるころですから」
そういうと、高島は椅子から立ち上がり、歩き始めた。

「プロデューサー、何処へ行かれるのですか？」

「コーヒーでも入れようかと思ひまして。眠気覚ましにでも」

「そ、それなら、私が入れますよ！いつも慣れていきますし」

「この前、水無月さんにご馳走になったばかりですし。…今日は私にご馳走しますよ」

慌てる朝日を制して、一人歩いていった。
数分後。

高島は二つのカップを持って帰ってきた。
美味しそうな湯気が立ち上っている。

ゆっくりゆっくりと、コーヒーをこぼさぬように歩いてくる姿が、朝日の心を妙にくすぐった。

「…よし」

掛け声とともに、高島は朝日の机にコーヒーを置いた。

朝日は、高島でもこんな声を出すのかと微笑ましくなった。

「ありがとうございます」

「味は保障できませんが。どうぞ」

「それじゃ、いただきます」

暖かいカップを持って、口へと運んだ。
喉を暖かいコーヒーが通っていく。

「…あゝ。すっごく美味しいですよ！」

「…そうですね？私は水無月さんのコーヒーのほづが、美味しいと思うんですけど」

高島は、真剣な目で首を少しかしげる。

「私のより、全然いいですよ!」

朝日は目を輝かせて言う。

まだ首をかしげている高島。

朝日はとうとう、くすりと笑ってしまった。

「…どうかしましたか?」

「い、いいえ!ただ、高島プロデューサーが真剣な顔して首をかしげているのを見たの初めてだったので。

…なんか、いいなあって」

そついい終えると、恥ずかしそうにコーヒースする。

高島は朝日を見ながら、また首をかしげる。

「そうですか?…なんかいいなあ……ですか?」

「いや、ただ私が思ったことなので。あまり気にしないでください」
考え込む高島を見て、慌てて返答した。

しかし、しばらくの間、ぶつぶつと「…なんかいいなあ」と呟いていた。

そんな姿がどうも可愛らしかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2804g/>

Contrary to a heart

2011年1月2日02時33分発行